

平成31年度使用小学校用教科用図書

小学校 全教科（「特別の教科 道徳」を除く）

採択地区協議会議事録（概要）

北諸県採択地区協議会

【小学校 全教科（「特別の教科 道徳」を除く）】

協議（主な意見）

- 小学校「特別の教科 道徳」を除く全教科については、第1回採択地区協議会において、事務局より説明があったとおり、新たな図書の申請がなかったため、これまでの使用実績を踏まえ、平成26年度採択における調査研究の内容を活用して協議・選定を行う。
- 選定の観点は、平成26年度に調査研究された教科書が、北諸県採択地区の児童の実態に合っているか、不具合等がないかどうか。
- 子どもたちに一番身近な保護者は、現在使用している教科用図書に不具合があるという意見はあがってきていないので、現在使用している教科書がよいと考えるという意見であった。
- 子どもたちが使用している実態を直接把握している校長の意見は、平成26年度に採択された現教科書は子どもたちの実態に合ったものであるという意見であった。
- 学校訪問で子どもたちの様子を見たり、校長から学校の状況等について話を伺ったりしている教育委員の立場からの意見は、現在使用している教科書に問題はみられないというものであった。
- 多くの学校を訪問しているが、先生方から現在の教科書が使いにくいという意見も聞かないし、教育活動を見ても、教科書を上手く活用しながら授業を展開されており、問題はみられない。
- 前回の採択で、専門委員の先生方がしっかり調査研究され、採択地区協議会で現在の教科書を慎重に採択されている。今回、全ての見本本がそろっていないという状態で新たな教科書を採択することはいかなるものか。むしろ、全ての見本本がそろっていないという中で新たに採択した教科書を使うべきではないと考える。
- 平成26年度の採択委員の意見として、現在使用している教科書については、責任をもって採択している。

【平成31年度 小学校全教科（「特別の教科 道徳」を除く）の教科用図書についての採決】

- 平成26年度採択における調査研究の内容及び保護者、学校、教育委員、前回の採択委員、それぞれの立場からの意見から協議した結果、平成31年度の小学校「特別の教科 道徳」を除く全教科の教科用図書については、現在使用している教科書の平成31年度までの継続に全員一致で決定。

平成31年度使用中学校用教科用図書

「特別の教科 道徳」

採択地区協議会議事録（概要）

北諸県採択地区協議会

【中学校 「特別の教科 道徳」】

質疑（回答者：専門委員長）

Q： 小学校で学んだことを中学校へ生かすといった視点が、生徒にも教師にも明確に把握できるような特徴的な教科書はあるのか。

A： 小学校で学んだ題材を扱っている教科書会社は、東書と光村の2者ある。

Q： 道徳科の授業は年間35時間だが、どの教科書も35時間分あるのか。35時間分の題材が掲載されていない場合は、指導者が資料を探してきて授業をすることになるのか。

A： 補助資料を含めて、35時間以上の題材が確保されているが、日科のみ、22題材しか掲載されていない。不足している分は、指導者がこれまでの副教材などから実施することになる。

Q： 道徳の授業をする上で、北諸県地区の生徒の課題は何か。

A： 多面的・多角的に考えさせ、深めさせるような授業をしていくことに課題がある。話し合い活動をとおして多様な価値観に触れ、時には対立が生じる場合があることも含めて、誠実に道徳的価値に向き合いながら考え続ける姿勢を養うことが大切である。

Q： ユニバーサルデザインの観点からは、どのような配慮がされているのか。

A： 文字フォント、読み仮名等、それぞれに配慮がされている。また、紙質や紙色については、目に優しい乳白色の紙色や、写真、イラスト、図表などが鮮明に見える白を基調とした発色系のよい紙色など、それぞれに特徴がある。

Q： 他教科との関連が分かりやすく掲載されている教科書はあるか。

A： 関連のある教科・領域について、タイトルや独自のマークを作成して目次に表示したり、巻末ページの一覧表に示したりするなど、各者それぞれに工夫がされている。

Q： 評価への活用についてはどのような工夫がされているか。

A： 別冊がある2者については、別冊の中に丸をつけて自己評価したり、自分の考えを自由記述したりする欄が設けられている。別冊がないものについては、教科書の中に数値的に評価するシートがあるもの、星マークを色塗りするもの、文章で自由記述する欄が設けられているものなどがあり、各者それぞれに工夫されている。ただし、学研については、記述する欄や自己評価する欄等などは設けられていない。

協議（主な意見）

- 道徳が教科化されることにより、評価が非常に大切になってくる。教師が生徒一人一人の心の成長を把握したり、生徒自身が自分の心の成長に気付いたりするような記録が教科書にできるかどうかが大切だと思う。
- 別冊には、どのような観点から考えるのかがはっきり示されている。しかし、北諸県地区の実態としては、話し合い活動をとおして多様な価値観に触れさせ、気付き、考えさせる授業の展開が求められている。別冊があることで授業の流れが見え、授業で意図することを生徒が先読みできてしまうというデメリットもあり、指導する立場からは、別冊の必要性をあまり感じない。
- 週に1回、道徳の教科書を持ち運びすることになるが、教科書は持ってきても別冊を忘れてしまったり、落として無くしてしまったりすることも起きてしまうので、生徒にとって別冊はない方がいいと思う。
- 別冊は、授業が終わった後に書いて提出し、次の時間まで教室に置いておき、教科書だけ持って帰るという方法もとれるのではないか。
- 別冊についてはメリット、デメリットの双方の意見がある。
- すべての題材にメモ書き程度の書く欄が設けられているものがよい。
- 道徳性が身につけているように見えるが表面的であるという北諸県地区の生徒の実態を考えると、小学校で学んだものを中学校で学び直し、自分の心の成長についてもう一度見つめ直すというような構成がされている方がよい。
- 光村は、1学年に1題材ずつ3学年をとおして小学校で学習したことを中学校で更にもう一度学び直しができる構成になっている。自分の道徳性の深まりがどの程度なのかという事を振り返らせるためによいと思う。
- 東書は、「Action」という項目があり、「役を演じてみよう」や「話し合ってみよう」という枠があり、メモ欄もある。自分達で話し合うことはなかなか難しいかと思うので、こういう項目のある方が、子どもたちも話しやすくなるのではないかと感じる。ただ、中学生に必要なのかどうかは疑問である。
- 教科書の内容だけでなくイラストも中学生という発達の段階に合っているものがよい。小学校の低学年の教科書のように感じられるイラストが使われている教科書はふさわしくないと思う。
- 東書と光村には、表紙裏のページに詩が掲載されている。この詩は道徳の教科書で一番初めに子どもたちが出会うものであり、この教科書を好きになるかどうか、家に持って帰って読んでみようという気持ちになるかどうかに関わってくると思う。光村に掲載されている詩は、北諸県地区の生徒にとって、理解しやすく、身近なものとして感じられやすいと考える。

【平成31年度 中学校「特別の教科 道徳」の教科用図書についての採決】

- 賛成多数で「光村」を選定。